

「全治3か年」

2024・1・17 重枝 一郎

日本の学校は様々な**学校行事**がある。本校にも伝統的な行事をはじめ、それぞれの学年において年間に行事を配置し、学校生活に「**変化と秩序**」をもたらしている。その行事をステークホルダーは見学し、生徒の成長を共に喜び合い、学校への信頼感を抱く。教師の様々な苦勞に敬意を表すと共に、忙しい日常を想像し同情の心を寄せることもある。この人たちが学校応援団となって、学校教育を維持してきたとも言える。

しかし、コロナ禍の行動制限は、学校を勉強だけの空気に変えた。ただ黙々と学習に取り組みせる。一方通行の授業、歌わない音楽、応援のない体育……。一人一台端末で日々の授業は目先の変化でカバーした。

一方、そういうことになっても生徒は与えられた運命に素直に従った。賑やかだった昼食時間も前を向いて黙食を続けた。不気味な光景だが誰もがそれを受け入れていた。コロナ感染予防対策の大義が、学校生活での個人のわがままを封じた。そして、友人とのコミュニケーションの場面が減少した。それは日常生活全般に及んだ。例えば、家族での外食の風景では、これまで家庭でのマナー違反としていた食事中的スマホいじりも市民権を得た。会話しない親子がそれぞれスマホをいじり、食事が運ばれたときだけ、ようやく顔を上げる。食べながらのわずかな会話、食べ終わったらまたスマホに戻る。この光景は今もまだある。低きに流れた行動パターンは容易に変えられない。これまでも家庭でのコミュニケーション不足は言われていたが、コロナ禍で一気に低下した。こうして子どもたちのストレスは少しずつ沈殿していった。

コロナ禍の3年間で、学習面の影響はそれほどないという結果だったが、運動面での機能低下は話題になった。また、不登校の子どもが増加し、全国のどの教室もボンボンと子どもたちがいない机が点在する。

不登校の改善には、学校が子どもを引き付ける力と、家庭が子どもを追い出す力の合力が必要になる。どちらかが非力だと効果が発揮できない。日本では、学校の引き付ける力ばかりが話題となり批判される。マスコミも家庭の問題に言及しない。米国では、子どもが学校に行かないとネグレクトや養育放棄で罰せられるから家庭も親戚までもが必死になると聞く。

加えて、子どもや若者の自殺増加も聞く。もちろんその背景はそれぞれなのだが、コロナ禍での生きづらい空気が、霧のように前途に立ち込めたことも想像できる。

私たちが生きづらい空気からの回復途中ではないかと思っている。発達段階的に一番表面化しやすい小学校の話は知っておきたい。なぜなら私たちの中にも「昔のレベルとは違う」ということを悩んでいる教師が多いからである。今年私が相談を受けた小学校の先生からの話を紹介する。A小学校では6年生3クラス全て学級崩壊を起こしたそうである。どのクラスも中堅世代の男性教諭であり、学年主任は授業も学級経営も優れた40歳男性教師、それでも崩壊は改善できなかった。B小学校では他の教職員からも信頼が厚い女性教諭が学級崩壊を起こし病休になった。教頭が代理担任に入ったが収拾できなかった。こういう話を数多く聞いた。2月にはある小学校からいじめ等の職員研修を依頼された。今職員室がどんよりしていると。

このダメージにつける薬は？ 勉強はそれなりにキープできているので、最初に書いたが、「**変化と秩序**」をもたらす「**学校行事**」と**コミュニケーションの活性化のきっかけ**となる「**教師の語り（明るさ・前向きさ）**」が治療薬になる。この回復には「**全治3か年**」の治療期間は最低有すると言われている。だから先生方には、「なかなか思うような生徒の姿になっていない」と落ち込みすぎず元気であってほしい。「**全治3か年**」と思ってやっていこう。